

研 究 科 日 誌

(2008年10月～2009年 9 月)

研究科日誌（2008年10月～2009年9月）

Chronology（Oct. 2008-Sep. 2009）

●地域社会研究会研究報告発表会

2008年度 第4回研究報告発表会

2008年12月6日（土）15：00～ 総合教育棟 地域社会研究科演習室

・「産み育てることのフィロソフィー」

大瀬富士子（5期生 地域政策研究講座）

・「道徳の所在－デュルケム社会学からのアプローチ」

西敏郎（7期生 地域政策研究講座）

2008年度 第5回研究報告発表会

2009年2月7日（土）15：00～ 総合教育棟 418講義室

・「地域ブランドと地域経済－ブランド構築から地域産業連関分析まで」

野崎道哉（研究生）

2008年度 第6回研究報告発表会

2009年3月14日（土）15：30～ 総合教育棟 地域社会研究科演習室

・「下北産いちごを教材としたエネルギー教育の実践報告」

野澤敬之（7期生 地域政策研究講座）

2009年度 第1回研究報告発表会

2009年5月9日（土）15：00～ 総合教育棟 418講義室

・「地域文化と内発型まちづくり」

津田純佳（8期生 地域政策研究講座）

2009年度 第2回研究報告発表会

2009年7月11日（土）15：00～ 総合教育棟 地域社会研究科演習室

・「私の経営革新について」

葛西幸雄（6期生 地域産業研究講座）

内容：時代の変化を感じ取り、地域社会の要望に対応しながら、会社を変化させてきた。その経営の歴史と経営革新の6つの判断基準について

●学会発表など

田中泰恵（3期生 地域政策研究講座）

・学会発表

「高等学校福祉科卒業生が経験した社会福祉実習と実習からの学び

－卒業生ライフコースアンケート調査から－」

2008/11/1・2 第16回 日本介護福祉学会大会 仙台白百合女子大学

「働き方から見た高校福祉科卒業生の現場実習の評価－ライフコースアンケート調査より－」

2008/11/29・30 日本福祉教育・ボランティア学習学会第14回徳島大会 四国大学

・論文

「現場実習における困難と実習からの学び

－高校福祉科卒業生のライフコースアンケート調査から－」

『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』 Vol.13, 2008, p25-34

・著書（分担執筆）

『高校福祉科卒業生のライフコース－持続する福祉マインドとキャリア発達－』

ミネルヴァ書房, 2008年, p43-69「第3章 高校福祉科卒業生の在学中の傾向」

田村真広 保正友子編著

葛西幸雄（6期生 地域産業研究講座）

・学会

日本実践経営学会 第5回韓中日国際学術大会 コメンテーターとして参加

2009/10/24～27 韓国釜山市 東義大学校

工藤規会（6期生 地域政策研究講座）

発表時：川内規会

・学会発表

「SP/SC活動に取り組んだ関係者の目的意識形成過程－“やりがい”と行動変容－」

2008/10/10 第2回日本セーフティプロモーション学会学術大会（東京都）

「医療従事者のWFCの研究からみる心理的考察とこれからの調査のかかわり」

2009/3/8 2008年度日本コミュニケーション学会東北支部研究会（仙台市）

「Understanding the Decision-Making Process of Local Citizen's in Relation to Safety and Health Promotion in Community Activities」

2009/7/18

The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education (Tokyo)

・講演

2008/11/30, 2009/7/10, 9/10 看護技術スキルアップ研修

（青森県立保健大学）

「コミュニケーション・スキル」

- | | | |
|------------|--|-------------------|
| 2008/12/9 | 五所川原市女性再チャレンジ事業
「コミュニケーション講座」 | (五所川原市公民館) |
| 2008/12/13 | 看護現任研修会
「COM能力を高めその一歩を踏み出そう」 | (十和田市立中央病院) |
| 2009/2/11 | 看護現任研修会 | (青森県立保健大学) |
| 2009/3/13 | 中部上北2町介護支援専門員研修会
「人とのCOMを良好に保つためには」 | (東北町保健センター) |
| 2009/3/15 | 青難聴福祉学習会
「私たちのCOMに大切なこと」 | (青森県聴覚障害者情報センター) |
| 2009/3/17 | 救急看護認定看護師セミナー
「アサーティブな考え方と実践」 | (青森県立保健大学) |
| 2009/6/16 | 再就職準備セミナー
「自分を活かすコミュニケーション」 | (アウガ青森市男女共同参画プラザ) |
| 2009/7/7 | 再就職準備セミナー | (十和田市総合体育センター) |
| 2009/7/26 | 青森県手話通訳者養成講座
「ことばのしくみ」 | (青森県聴覚障害者情報センター) |
| 2009/8/24 | 平成21年度新人教育研修会 | (県民福祉プラザ) |

白石睦弥（6期生 地域文化研究講座）

・学会発表

「被害と救済－明和津軽地震「御救」の実態－」

2008年度 東北史学会・秋田大学史学会合同大会（日本近世近代史部会）

2008/10/5 秋田県秋田市 秋田大学教育文化学部3号館

明和津軽地震が発生したのは、明和3年1月28日（1766年3月8日）の夕刻のことである。津軽地域内陸型としては過去最大級とも考えられている同地震は、領内最大の被害をもたらした地震としても知られている。豪雪の厳冬期に発生したため、積雪による家屋倒壊率の上昇が指摘されており、調理や暖房用の火器使用のために火災が発生しやすい状況でもあった。また、地震発生後間もなく、当面の食料さえも得られず、多くの領民が渴命に及んでいる旨の報告が寄せられ、弘前藩庁は対応を迫られた。この際、藩の動向は比較的迅速で、罹災領民には米穀が付与された。但し、「御救」として与えられるはずの米穀が、当該事例においては貸し付けとされており、救済本来の意味を失っていた。

「岩木山と災害対応－硫黄山出火を中心に－」

(セッション7 近世の地震・津波・火山活動その2)

「岩木山信仰と領主権力－硫黄山出火とその影響－」

(セッション9 ポスター発表その2)

第26回 歴史地震研究会 2009/9/13 滋賀県大津市 明日都浜大津4階ふれあいプラザホール

岩木山は青森県津軽地域に聳える標高1625メートルの独立峰で、火山としても知られているが、近世期を通じて大規模な被害や死者をとまなう災害を引き起こしていない。

岩木山の活動の中に硫黄山出火というものがある。硫黄山出火は火山性の水蒸気爆発などによって露出した硫黄が延焼するというものであったが、実際に城下町や在方の人が居住している地域にほとんど影響は無いにもかかわらず、弘前藩はこの出火に対応し、領民は動揺を見せながらもその消火に自主的に加わった。この出火の特徴は、他の火山性災害と異なり、領民の尽力と藩主の威光によって制御できると考えられていたことである。

岩木山に対する弘前藩の信仰は代々厚いものがあり、4代藩主信政は自ら神式で岩木山に葬られ、このことも岩木山信仰と弘前藩の結びつきを強めた。現代も岩木山信仰圏が津軽領と重複しており、近世期から連綿とその信仰が続いていたことが理解できる。

また、岩木山の変事や地震などの災害、蝦夷地出兵などに際して、下居宮や百沢寺で行われた祈祷は、弘前藩と岩木山が内外の危機から藩領すなわち藩国家を守ることを明示し、それは藩体制の強化にも繋がった。

高橋匡（6期生 地域産業研究講座）

・学会発表

「リング搾汁残渣からの食酢製造に関する研究」

2009/9/16 日本応用糖質科学会平成21年度大会 弘前大学

三浦俊一（6期生 地域政策研究講座）

・学会発表

「津軽地方のねぶた・ねぶたの持続可能性について」

2008/10/26 日本都市学会第55回大会 神戸国際会館

緒方英樹（7期生 地域政策研究講座）

・学会発表

「『土木の絵本』から見た土木教育の可能性と方向」

2009/3 土木学会 教育論文集 査読付論文

・講演

「台湾に尽くした土木技術者が映画になった！

～八田與一技師の縁で出会った台湾と日本の人たち～」

2009/7/24

・受賞

映画「パッテンライ！」企画者

土木学会第23回映画コンクール最優秀賞受賞

2009/5/29 土木学会総会

津田純佳（8期生 地域政策研究講座）

・学会発表

「地域文化による内発型まちづくりの持続可能性について」

2008/10/26 日本都市学会第55回大会 神戸国際会館

●学位論文

〈学位論文公開審査会〉

平成21年8月8日（土）13：00～ 総合教育棟4階 404講義室

「地方社会における一次産品を中心とした地域ブランドの形成手法に関する研究

－地場産業の活性化を視野に入れた地域ブランドの価値と形成手法の考察を中心に－」

石原慎士（第5期生 地域産業研究講座）

「Education System Innovation for Regional Economy and Social Development : Revitalization of Lowell, Massachusetts」

（地域経済・社会開発への人材育成システム：ローウエルの復活）

清剛治（第4期生 地域産業研究講座）

「要支援親子への支援の「つなぎめをつなぐ」保健師の活動に関する研究

－3歳児健診から就学まで－」

北宮千秋（第3期生 地域文化研究講座）

弘前大学大学院地域社会研究科年報 投稿要領

平成20年9月制定 平成21年4月実施

本年報は弘前大学大学院地域社会研究科によって発行される学術雑誌である。地域社会に関する研究成果を内外の研究者から広く募集し、その成果を掲載発表することにより、地域社会の発展に寄与することを目的とする。

1. 発行時期

年1回発行する(12月刊行予定)。

2. 投稿締切り

投稿は随時とするが、当該年度内の本年報に掲載を希望する論文等の投稿締切日については年度初めの原稿募集案内に明記している。

3. 提出原稿は論文、研究ノート、その他という三つのカテゴリーのいずれかを明示して提出する。

4. 提出物

- ・フロッピーディスク(またはCD等)
- ・ハードコピー(本研究科院生および外部投稿者は3部、本研究科修了者、研究科教員および編集委員会が依頼した執筆者は1部)。
- ・原稿は図表等のスペースを含めて日本語の場合は32,000字以内(A4用紙1枚につき1600字、計20頁)とする。ただし要旨の字数は含まない。
- ・論文及び研究ノートの場合、いずれも英文300wordsの要旨・キーワード(4項目まで)と日本語800字の要旨・キーワード(4項目まで)を含むこと。「その他」の場合は英文タイトルのみとし、投稿者の希望により英文300wordsの要旨と日本語800字の要旨を付すこともできる。
- ・原稿には投稿者の所属、肩書および連絡先(住所、電話・FAX番号、メールアドレス)を付記し、氏名にはフリガナとローマ字表記を添えること。

5. 査読

本研究科院生および外部投稿者により提出された原稿は、2名のレフェリーによる査読を経て、編集委員会において採用の可否を決定する。

6. 校正

校正は原則として著者が行い、3校までとする。

7. 原稿は採用の可否にかかわらず返却しない。また掲載された論文等の抜刷りは50部まで無料である。

8. Web上の公開に関する手続き

本年度に掲載される論文及び研究ノートはPDFファイルの形で、地域社会研究科のWeb上に公開する。ただし、著者の承諾が得られた論文及び研究ノートは、全内容を公開し、部分的に承諾が得られなかった論文及び研究ノートは、承諾を得られなかった箇所を除いて公開する。Web上に公開された論文及び研究ノートの著作権は、地域社会研究科に帰属する。また、公開に伴いガード等が必要とされる事項については、編集委員会が対応・処理する。投稿者または投稿者の代表者は、投稿にあたって、「論文及び研究ノートのWeb公開に関する承諾書」(弘前大学大学院地域社会研究科、平成17年10月26日承認)に、署名・捺印し、意思表示を行うものとする。

9. 原稿の提出先・連絡先

〒036-8560 弘前大学文京町1番地 学務部教務課課長補佐

電話：0172-39-3960(直通)

E-mail：jm3960@cc.hirosaki-u.ac.jp

I. 全般的留意点

1. 原則としてワードプロセッサを使用して作成した原稿を提出する。
2. 原稿は横書きと縦書きの両方も可とする。

II. 本文

1. 本文が始まる前にタイトル、氏名、要旨、キーワードの順に和文とその英訳を挿入する。タイトルは内容に即して平明・簡潔にする。
2. 項目の区分について
横書きでは
(1) I, II, III, [節]
(2) 1, 2, 3, [項]
縦書きでは
(1) 一, 二, 三, [節]
(2) (一), (二), (三), [項]
3. 数字について
横書きでは原則としてアラビア数字を使う。ただし、本文中ではコンマを用いず、万以上の数字には万、億、兆などを用いる。概数の場合は、十数人、数十年などとする。
[例] 23億500万円 1万2000人 第2次5カ年計画 表1 0～5歳
縦書きでは原則として漢数字を使う。
[例] 二十三億五百万円
4. 年は西暦を使用する。特別の暦法による暦を使用する場合には西暦年を〔 〕で付記する。
5. ワードプロ印刷設定にあたっては、行間を十分あける。大文字・小文字、数字、アルファベットの違いを明確にする。とくに「一」と「-」の違いに留意すること。

III. 文献の引用および注

1. 文献の引用および注は、横書きでは原則として本文中の該当箇所の右肩に片括弧付きの番号で表示する。[例] 三内丸山遺跡⁵⁾は、.である⁶⁾。
縦書きでは原則として本文中の該当箇所の右に両括弧付きの番号で表示する。[例] 藩³⁾。
2. 出典または注は、本文末尾に一括して番号順に記載する。その際、雑誌の場合は著者名、論文等の題名、掲載雑誌名、巻・号、頁、発行年を、また単行本の場合は著者名、書名、出版社名、頁、発行年を記載することを原則とする。

[例] 福島真人「内面とカージャワ神秘主義と伝統的政治モデル」『民族学研究』52(4)(3月) pp.330-350、1988年。

3. 前出の文献を再び引用する場合は前掲、続けて同じ文献を引用する場合は同上で表記する。

[例] 前掲「内面とカージャワ神秘主義と伝統的政治モデル」 pp.351。

同上書(論文)、pp.352。

Ⅳ. 図表、写真等

1. 1図、1表、1写真ごとに本文とは別に原稿用紙1枚ずつにまとめる。図、表の番号はそれぞれ、図1、表1のように通し番号とし、写真は図として扱う。図の場合にはその下に、表の場合にはその上に、番号とともに見出しを入れる。必ず単位、出所を明記する。

[例]

表1 2006年産日本りんごの主な輸出先およびその数量

単位：トン

台 湾	香 港	タ イ	中 国	アメリカ	インドネシア	ロシア
22,123	352	205	197	60	44	36

(注) 台湾、香港から中国大陆への再輸出分は考慮していない。

(出所) 財務省「日本貿易統計」2007年5月。

2. 横書き、縦書きともに、図・表等は縮尺を明示して、文中に挿入する場所を指定する。ただし、カラーページに関しては論文末に一括して掲載して、負担を軽減する。

以上